

座席行動の規定要因

Determinants of Seating Behavior

(平成6年4月8日受理)

北川 歳昭

Toshiaki Kitagawa

Key words : 座席行動 seating behavior, 個人空間 personal space, なわばり territory

Abstract

The first purpose of this study is to clarify the relationship among three concepts of spatial behavior ; personal space, territory and seating behavior. It has been discussed that seating behavior is more influenced by culture and convention than is personal space or territory.

The second purpose is to consider the determinants and the eliciting mechanism of seating behavior. The determinants are considered to include at least six factors ; physical environment, social environment, physiological and biological features, knowledge of culture and convention, personal psychological traits, and interpersonal dynamics.

1. はじめに

座席の存在する空間の中で個人が物理的及び社会的環境と相互作用しながら着席位置を選択し決定する心理行動的過程を「座席行動 seating behavior」と呼ぶ。動物のなわばり行動 territoriality にその生物学的起源があるといわれている空間行動 spatial behavior (空間利用行動, プロクセミックス) は, 近年, 人間行動生物学 human ethology の発展と相まって, 非言語的コミュニケーションの一分野として注目されている。座席行動は, この空間行動の一部として位置づけられるが, 「座席の存在」という極めて日常的で文化・慣習的な環境下における空間行動現象といえる。この座席の存在は, 空間位置の選択の自由度を物理的, 心理的, 文化的に制約することであり, 他の空間行動の場合に比べ, 座席行動の成立過程に関与する要因を複雑なものにしていると考えられる。また, 座席行動は, 物理的世界 (空間, 地理) と心理的世界 (認知, 感情, 対人関係) と文化的世界 (文化慣習的規範) の3者を結びつけ, 相互に信号変換する, いわばインターフェースの役割を果たしているが (図1), それは, この現象が, 研究対象としてさまざまな学問領域が輻輳した周辺的かつ学際的領域に位置していることを意味している。そのため, 座席行動は, これまで, 行動生物学, 生態学, 地理学, 文化人類学, 社会心理学, 教育心理学, 臨床心理学, 精神医学, 建築学, 環境心理学などの学問分野において関心がもたれ, それぞれ

の分野で断片的に研究がなされてきた。しかし、それぞれの学問分野において興味深い周辺のトピックスという扱いをなされてきたがゆえに、座席行動は、空間行動の一表現型（松尾，1993）という位置づけのまま、理論的体系化もなされずに今日に至っているのである。

本稿では、空間行動に関するこれまでの研究を展望し、座席行動をめぐる諸概念を整理しその関係を明らかにするとともに、座席行動の成立に関わる要因とその成立メカニズムについて考察を試みる。

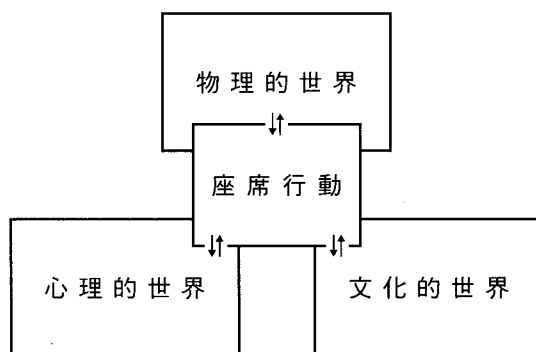


図1 3つの世界を結ぶインターフェースとしての座席行動

2. 座席行動および関連する空間行動現象

空間行動は、人間の行動システムと物理的空間的システムとを結びつける現象として多くの研究の対象となってきた。しかし、空間行動に関する概念は、いまだ体系化をみておらず、さまざまな用語が用いられ、それぞれの空間行動現象が断片的に研究されている（三井，1981）。

ここでは、諸概念を整理するために、空間行動の典型として研究されることの多い「なわばり」と「個人空間」という2つの概念を取り上げる。両概念とも空間行動現象そのものというより、現象を説明するために用いられた構成概念である。まず、それら2つの構成概念がどのような意味で用いられてきたかを明らかにし、その上で、「座席行動」との関係を考察する。

1) なわばり

現代の生物学では、なわばり territory とは、「動物の個体・つがい・群れ・単位集団などが、他の（一般には同種の）個体ないし単位集団と地域を分割して生息し、侵入された場合にこれを防御する空間」を指し、これを社会的秩序系の制度とみて「なわばり制 territoriality」と呼ぶこともある（山田他，1983）。

Edney (1974) は、なわばり行動 territoriality について、「一個人ないし数人の個人が自分のものとして排他的に使用し続けている物理的環境との関わりの中で示す一連の行動」(p. 959)と定義し、これまでの研究を展望している。

(1) 動物のなわばり行動

動物においては、なわばりは、哺乳動物はもとより、鳥類、は虫類、魚類など脊椎門全体にわたってみられる現象であり、生態学および行動生物学の中ではすでに確立された概念である。なわばり

は、個体、つがい、集団がもっており、すべての侵入者ないし同性あるいは異種の侵入者に対して防御される。Carpenter (1958) は、なわばりの機能として、個体に十分な広さを確保する、個体数を調整する、優位構造を強化する、異性をめぐる闘争を減らす、安全性を確保する、疾病の蔓延を防ぐ、独裁制を制限する、排泄物の処分地を分散するなど、32もの機能を列挙している。この主張は、なわばりの主たる機能が、個体を空間的に分散する、という事実由来している。

Wynne-Edwards (1965) は、なわばりが社会的行動（競争と支配）と個体数調節とを結ぶものであり、Darwin の自然淘汰の原動力となると指摘している。すなわち、共同体（群集 community）は、その成員数を、なわばりと、それに伴う食物や配偶者をめぐる競争によって制御している。競争における勝者は、優位な個体として社会的地位を獲得し、食物と配偶者が保証され、唯一の繁殖者として次世代に子孫を残すことができる。しかし、同時に、彼らは少数者であり、また、地域全体に薄く分布しているため、限られた食物や配偶者しか手に入れることはできないので、次の世代の成員数もまた制限される。こうして、なわばりは、適者生存という淘汰過程の中心的部分として、生息地の食物資源の再生産能力を越えさせない個体数の調節装置として機能しているのである。

人間の社会にも動物のなわばりと類似した現象がある。例えば、土地をめぐる競争や戦争、地位の高さと所有する土地やオフィスの広さとの相関関係などである。Lorenz (1969) は、同種内の攻撃性が個体間の相互嫌悪の源泉として機能し、集団成員の生息場所を拡散させるが、なわばり行動は、この種内憎悪の空間的表現であり、人間もまた例外ではないとしている。Ardrey (1966) もまた、人間も他の動物と同様に、なわばりを要求し防御するという生得的で根絶しがたい欲求をもっているとしている。Ardrey によれば、なわばりは、健全な生活に必要な3つの基本的要素、すなわち、安全（なわばりの中心において最も強い）と、刺激作用（外部者に対する防御が最も起こりやすい境界において最も強い）と、アイデンティティとを供給するという。

確かに人間が国家レベル、家庭レベル、一時的レベル（バスの座席など）において動物のなわばりと類似した行動を表出するのは事実であるが、人間の空間行動における複雑な様相（例えば、文化的な差、狭い空間での協力関係など）を説明するには単純すぎるのではないかと、この批判もあげられている。

Edney (1974) は、動物と人間のなわばり行動の差異を次のようにまとめている。①人間の空間利用法は非常に多様であるが、動物は紋切り型である、②なわばりと攻撃性との関係は、人間の場合、明確ではない、③動物は通常、一継続期間では唯一のなわばりしか使用しないが、人間は、いくつかのなわばり（例えば、家庭、事務所、別荘）を同時に維持する、④人間は一時的なわばり（例えば、レストランのテーブル）を占有することがあるが動物ではまれである、⑤集団による他集団のなわばりへの全面的侵略は、動物ではまれであるが、人間では起こる、⑥人間は、武器によって侵入せずともなわばりをめぐる戦いをすることができる、⑦人間は、敵意をもつことなく、日常的に自分のなわばりで同種他個体との交流を楽しむ。これらの差異は、動物のなわばり性が人間の行動表出のアナロジーにはなりえても、人間の行動を説明しきれないことを示している。

(2) 人間のなわばり性

Edney (1974) は、人間のなわばり性についての定義を3つに大別した。第1に、積極的防御 active defense を強調するもの、第2に、防御に加えた他の特徴にふれるもの、そして、第3に防御の概念を含まないもの、である。

なわばり性に積極的な防御が含まれるとするのは、動物と人間の同一性を主張する行動生物学者たちである。Lorenz (1969) は、「なわばり性は、一定の領域の防御である」とし、Ardrey (1969) は、「なわばりは、単一または集団の生活体が主に同種他個体に対して排他的な領域として防御する空間域である」としている。

なわばり性を単なる空間の防御以上のものと考えている Brower (1965) は、「なわばり性は、生活体が自分の身体の周囲に境界を確立し、その境界内の空間すなわちなわばりを主張し、それを部外者から防御する傾向である」とし、Stea (1965) は、「なわばりは、空間の一部を所有し占有したい（そして必要ならば、他者の侵入に対してそれを防御したい）という願望を反映している」と述べている。さらに、Sommer (1966) は、「なわばりは、個人、家族または集団によって制御されている領域である。強調すべきは、防御とともに、実際のまたは潜在的な物理的所有にある」とし、Pastalan (1970) は、「なわばりは、個人または集団が排他的領地として使用し防御する限定的な空間である。それは、所有しているという態度やその領域に物体を配置することによって象徴される所有についての心理的アイデンティティである」としている。

防御という用語を避けた定義として、Proshansky et al. (1970) は、「人間のなわばり性は、特定の空間領域を制御する行為とその努力である」と定義し、Sundstrom & Haythorn (1967) は、「なわばり性は、特定の空間的位置についての習慣的使用である」と述べた。Altman & Haythorn (1967) は、「なわばり性は、特定の椅子、ベッド、テーブルの座席に対する一貫した、しかも相互排他的な使用の程度によって定義される」としている。

このように、人間のなわばりの定義には、一定地域の個別化 personalization と防衛（防御）defense という特徴の他に、所有、制御、アイデンティティ、使用の排他性などの概念が加わっており、この現象が単純なメカニズムに基づいているのではないことを示している。さらに、Altman (1970) によれば、人間のなわばり性には、空間ばかりでなく、観念や事物の所有まで含まれているという。

2) 個人空間

(1) 動物のスペーシング

なわばりには、一定地域を防御するという側面の他に、個体相互の間に一連の定まった距離を保ち合う（スペーシング spacing）という側面がある。そのような相手との間に置く距離に注目した一連の研究がある。そして、それらは、個人空間という概念に引き継がれていった。

Hediger (1950) は、異種個体間のスペーシングとして、①敵が近づいた時にそれを越えると逃げ出す逃走距離（flight distance）、②敵に侵入されると攻撃する臨界距離（critical distance）を区別し、同種間の個体の行動を規定するものとしては、①仲間との間に置く正常な空間である個体距離（personal distance）と、②仲間との接触の限界の距離であり、それを越すと不安を感じ始める距離である社会距離（social distance）を区別した。

行動空間を機能的に分類したものとしては、Vine (1977) が、①常住域（home range）、②なわばり（territory）、③社会空間（social space）、④個体空間（individual space）を区分している。社会空間は、個体を中心として広がる空間で、他個体との社会的接触が始まる最初の関門となる。一方、個体空間は、社会空間の内部にあり、それ以上の相手の接近は撃退行動を引き起こす。個体

空間は身体の前方に広く、左右・後方が狭い卵形として表されることが多い。

(2) 人間のなわばりの分類と空間への言及

Lyman & Scott (1967) は、社会学の立場から、「あらゆる生物はそれが学習によるものであれ、生得的なものであれ、生存のためには空間のコントロールを必要としている点ではある種のなわばりを有している。なわばりを有することは人間の基本的な行動である」と述べ、4種のなわばりを区別した。すなわち、①規則に従う限り一般市民が利用できる公共的なわばり (public territory)、②常連客にとっての酒場のようにある程度の行動の自由と親近感を感じるホームなわばり (home territory)、③パーティなど社会的な集まりであり他者の侵入を防ぐ目に見えない境界線がある社交的なわばり (interactional territory)、④個人の身体および衣服や装身具でおおわれた部分である身体的なわばり (body territory)、である。

Altman (1975) も人間のなわばり行動を、①寝室とか居間などのように個人が絶対的権利をもつ私的空間である一次なわばり (primary territory) と、②たまり場のように個人が他者とかなり定期的に接触をもつ準公共の場所である二次なわばり (secondary territory)、③規則を守る限り誰でも利用しうる公共的なわばり (public territory) とに分類した。

(3) なわばりと個人空間の違い

Sommer (1959) は、なわばり territory という用語を避け、個人空間 personal space という用語を採用した。Sommer によると、なわばりと個人空間の違いは、①なわばりは動かないが、個人空間は、個体とともに移動する、②なわばりの場合、その境界には何らかの目印がつけられているが、個人空間にはそうしたものは無い、③なわばりの場合、その中心は明確でないが、個人空間は個体を中心に広がっている、④なわばりが侵された場合には戦いが生じるが、個人空間の場合は、自分が身を引くことによって守ろうとする、である。つまり、なわばりは、物理的事物および地理的位置を目安にした空間であるのに対し、個人空間は、個体を中心とした空間といえる。

(4) ホールの対人距離の分類

文化人類学者の Hall, E. T は、人が他者とコミュニケーションするときの距離を観察し、そのような空間利用の研究をプロクセミクス (proxemics 近接学) と名付けた (Hall, 1966)。彼によれば、身体を起点として、①密接距離 intimate distance、②個体距離 personal distance、③社会距離 social distance、④公衆距離 public distance という4種類の距離帯が区分されるという。密接距離 (45cm以内) は、家族や恋人のようなごく親しい相手との距離である。個体距離 (45~120cm) は、親しい友人と会話するときの距離であり、社会距離 (120~360cm) は、クラスメートや会社の上司や隣人との一般的な会話の場合の距離である。公衆距離 (360cm以上) とは、演説や講義のような場面で利用される距離帯である。Hall は、これらの距離帯が個体を取り囲む不規則な形をしていること、対人距離は特定の集団の中や状況において学習されるもので、文化によって差異があることなどを指摘し、その後の空間行動研究を刺激した。

3) 座席行動

座席行動という概念は、構成概念というよりむしろ現象記述概念である。座 (座席) がそこにあったときに、人がそのうちの一つを選択する過程である。むろん、座席行動の現象は、上記の2つの概念、なわばりと個人空間で説明できる部分も多い。

(1) 座席行動を対象とした研究

「座席行動」という用語を用いているわけではないが、座席行動に注目し、座席行動と関連する要因を探ろうとする研究は少ないわけではない。平尾ら（1964）や深沢ら（1965）は、医学的関心から医学学生や看護学生の受講時の着席位置とパーソナリティ特性や分裂病発病との関係、分裂病患者の座席行動との比較を試みている。Cook（1970）は、実験事態において着席位置はその社会的関係によって変わることを見いだしている。また、鈴木ら（1984；1986；1990）は、会議やゼミの場面の座席行動をなわばり性の観点から分析している。

小集団生態学 small group ecology という用語を用いて、教室、食堂、図書室、作業室などにおける座席行動を個人空間の分脈で精力的に研究したのは、ソマー（Sommer, R., 1969）であった。Sommer（1959）は、病院内のカフェテリアでの相互作用場面を観察し、①食事場面及び3人の会議場面での座席位置は、角と角の関係が好まれる、②片方がすでに座っているとき、次に座る者の位置は、女性同士では角と角、男性同士及び異性の時は相対面する位置が好まれる、③分裂病患者が被験者の場合、正常人とは異なった反応がみられること、などを見いだした。Sommer（1961）は、3～6人で構成された討議場面でリーダーとメンバーの占める座席位置を観察した。4人以上のグループのリーダーは、多くの場合、机の端を占め、メンバーは彼に近づいて座ることが示された。同様に、カフェテリアと図書館の2人づれの座席位置を観察。カフェテリアでは角と角及び相対面する座席が選択され、図書館では遠く離れた座席が選択された。両者の対人距離について、Sommer（1967）は、両者の距離が5.5フィート前後（社会的距離の近接相）までのときは斜め向き、それ以上だと横並びになると述べている。

Batchelor & Goethals（1972）は、8人グループに個人作業および集団作業の課題を与え、各人が自由に並べた座った椅子の間の距離を測定した。その結果、集団作業条件下での対人距離は平均6.5フィート（社会距離の遠方相）であるのに対し、個人作業条件下では平均12.3フィート（公衆距離の遠方相）であった。Giesen & McClaren（1976）もまた、司会者と3人の被験者からなる討論場面において、被験者間及び司会者との座席の距離を測定した。その結果によると、お互いの間の距離および司会者との距離において性差が現れ、いずれも相手が男性の場合、距離が大きく保とうとする傾向がみられること、などが明らかにされた。

三井（1981）が指摘するように、これらの研究は、お互いが座っている状況（つまり、座席行動）を取り上げており、その個人間の距離にHall, E. T. の分類図式がそのまま適用することはできない、という。つまり、Hallの定めた4つの空間区分は当事者がお互いに立っている条件下での対人距離に基づくものであり、座っている条件での接近は物理的に制約されたものとならざるをえないからである。この点について、Altman & Vinsel（1977）は、立っている条件で行われた実験の多くは密接距離の遠方相から個体距離の近接相を用いているのに対して、座っている条件では、個体距離の遠方相から社会距離の近接相までの設定になっていることを指摘している。

さて、それでは、単に対人距離における立位と座位の対人距離の差異だけを考慮に入れるならば、なわばりと個人空間の概念によって座席行動が十分に説明できるといえるのだろうか。

(2) 空間行動における座席行動の特異性

空間の中で、座（座席）が存在すること自体、そして、それが心理的に意味を持つこと自体、すでにその場は、すぐれて文化・慣習的な社会的環境といえる。そこには、対人関係の要因ばかりで

なく、文化・慣習に関する知識、文化・慣習や社会的規範に対する態度などが含まれている。座席行動は、空間利用行動の中でも、とりわけ文化社会的環境ないし社会慣習の知識が関わる領域といえるだろう。

また、単なる距離そのものよりも順序（序列）が優先されることも座席行動の特徴である。政治的地位と座席位置の順位（席次）の相関性はだれもが関心をもっていることである。逆に、会議の座席位置が重要な政治的議題となることもしばしばである（Cline & Puhl, 1984）。

実験ではないが、社会慣習の知識にもとづく最も典型的な座席行動の例話の1つとして、司馬遷による『史記』巻七「項羽本紀」に出てくる有名な「鴻門の会」の場面をあげることができる（田中他, 1978, pp. 197-199.）。

……（前略）

項王・項伯東嚮。亜父南嚮坐。亜父者范増也。沛公北嚮坐。張良西嚮侍。

（項王と項伯は東むきに坐り、亜父は南むきに坐る。亜父というのは范増のことである。沛公は北むきに坐り、張良は西むいてひかえている。）

……（中略）

この会見の席次についての説明は、会見の波瀾を予想させるものとして重要である。中国の建物は古来南むきに造られ、南むきの正面には、天子が坐る。だから、天子になることを「南面」、臣下として仕えることを「北面」という。ここではその上席に亜父范増をすえた。「亜父」とは、父につぐものという意。老年者に対して敬意をしめすとともに、范増がプレーン・トラストとしていかに尊敬されていたかがわかる。また、古代では東むきの席は、つねに優位を示す。この際、項羽と沛公とは対等関係であり、しかも沛公は項羽の客でさえある。ところが、会見の席次の優位は、項羽がわで独占されてしまった。

……（後略）

座席位置の方角と地位に関した当時の常識、恣意的で文化慣習的な知識がなければ、沛公がわは、自分に対する項羽がわの本心を見抜かず、命を失っていたかも知れない。読者としてもそのような知識がなければ登場人物たちの感情の機微を読みとることはできない。方位や方向、左右の位置、順序などの空間と社会的地位の関係に関する慣習的知識は、現代社会においても、政治的な会議はもとより、結婚式などの儀式にも、日常の会議や宴会の席次などにも色濃く反映している。「個人空間」（個人を中心とした空間の広がりや相手との距離）、あるいは、「なわばり」（特定地点や所有物からの一定距離範囲の防御）という行動生物学の枠組みでは、座席行動は解釈しきれないのである。人間行動を動物行動からのアナロジーで説明しようとする行動生物学のアプローチの限界であろう。

5) 空間 space ・ 場所 place ・ 慣習 convention

空間行動の3つの概念、個人空間となわばりと座席行動の関係について、空間についての知識の発達という側面から考えてみよう。発達の枠組みとしては、Piaget (1948) の空間表象の発達理論が示唆を与えてくれる。ピアジェの理論によれば、我々大人が理解している三次元ユークリッド空間は、子どもにも最初から理解されているわけではない。乳児期からの能動的な環境への働きかけを通しさまざまな段階を経て心的空間を形成していくのだという。一方、現象地理学者の Yi-Fu Tuan (1977)

によると、人間にとっての物理的環境は、広さとしての「空間 space」と、さまざまな意味と結びついた「場所 place」として経験されるという。この知能発達を縦軸に、空間と場所という環境の二側面を横軸に空間行動の発達について考察してみよう。

感覚運動的知能期の乳児にとって時間と空間はまだ「今、ここ」でしかない。空間は広がり space であって、そこには空間の関係づけや複雑な構造化ないし意味づけ（地理学や地誌学）は存在しない。乳児の関心は、まず自己であり、自分から一定のごく近い距離の範囲にある事物（食物）と人（母親）である。眼前にない事物、視野を越えた距離にある事物は、その存在も知らないし、知ろうともしない。たとえ眼前に他者の所有物が置かれていても、その意味を理解することはない。また、どこからが他者の領分で、その領分を侵すときには許可がいるなどということも知らない。理解しているのは、「自分を中心とした一定範囲の空間」を越えたところは、安心できない空間だというごく単純な構造である。あたかもアメーバのように、自分の周囲を欲求のままに動き回り、危険を感じとれば後戻りするのである。このように、乳児の理解している空間概念は個人空間の概念に近いと考えられる。乳児は、周囲に自我を主張し、自分の周囲の空間を守り、他者が近づいてくると恐怖心を起こすが、それは自己中心的な視点（粹組）から過ぎず、事物や方角と結びつけた絶対的な空間座標（地理学上の位置）には気づいていない。このように、個人空間ないし対人距離 interpersonal distance という概念は、発達的にはもっとも初期の段階で現れる空間概念ではないかと推察される。なわばり制が系統発生上、脊椎動物より下等な動物では（昆虫の一部を除いて）きわめてまれである、という生物学的事実もこの点を裏付けているように思われる。

前操作期から具体的操作期の幼児・児童期では、自我が発達し、さらに他者の存在を認めることができるようになると、自己の主張ばかりでなく、他者との共存、協力が生活のテーマになる。また、移動能力が向上すると、行動範囲も広がり、他者との物理的接近の機会も増え、他者の個人空間侵害の可能性も高まる。他者との公正な関係、共存しうる空間利用を追求すれば、もはや、自分の身体を起点とした一定範囲の空間は自分のもの、という自己中心的な空間のとらえ方では限界がある。そこで、事物の位置、所有物といった客観的な物理的存在や特徴を目安にした、所有者の場所 place としての一定空間領分を相互に尊重するという、なわばりの概念が生まれてくる。もし、各個人がなわばりを主張するために十分な空間があるならば、相手との交渉を制御するために遠すぎもせず近過ぎもしない相互に納得しうる距離が確保され、その空間が固定化し安定化するであろう。所有者が眼前にいてもその空間や所有物は尊重されねばならない。なわばりの中では一人一人が王様であることを互いに認めなければならない。

ところが、もし、空間の広さが十分確保されない場合、あるいは、移動や方向に制限が加えられた場合、それまでのようななわばりは成立しなくなる。なわばりの相互尊重で保たれていた力関係の均衡が崩壊し、お互いが個人空間を侵害し合う混沌の世界となる。個人間の力関係が未知の場合にはそれが確定するまで戦いや軋轢が生じるであろう。なわばりの概念のレベルでは解決が困難な事態である。そのような事態で、人間関係、つまり、親しさの程度、権力関係、公の上下の序列などの複雑な社会的関係を暴力的ではなく知的な方法によって秩序づけるためには、個人に分配する空間を狭くし（つまり座席を与え）、文化慣習的な知識 convention に基づく空間配分の規則に従った行動が求められる。形式的操作期の段階ではそれが可能となるであろう。つまり、その事態の解決には、社会的構造の理解、空間構造の理解、そして、両者の関係の理解を成立させるルールとしての慣習的知識とい

う、極めて複雑な知識のネットワークの構築と論理的思考力が求められるからである。人間関係ないし社会的構造が文化慣習的な形式と規範に基づいて物理的空間的に表出される座席行動の誕生である。空間概念と空間行動の発達レベルをまとめると、以下のようになるであろう。

- レベルⅠ：空間 space, つまり、「個人空間」の概念の発達段階
 自己を中心とする空間（相対的座標軸）の確保
 対象との距離（対人距離）の制御
- レベルⅡ：場所 place, つまり、「なわばり」の概念の発達段階
 場所（位置、絶対的座標軸）への執着，防御（なわばり行動）
 所有権の主張，明示（マーキング）
 他者の相互承認，なわばり内での権威尊重
- レベルⅢ：慣習 convention, つまり、「座席行動」の概念の発達段階
 複雑な人間関係ないし社会構造の認知
 人間関係ないし社会構造の空間的表出に関する知識
 時間的空間的に制限された場での意図的儀式的表出

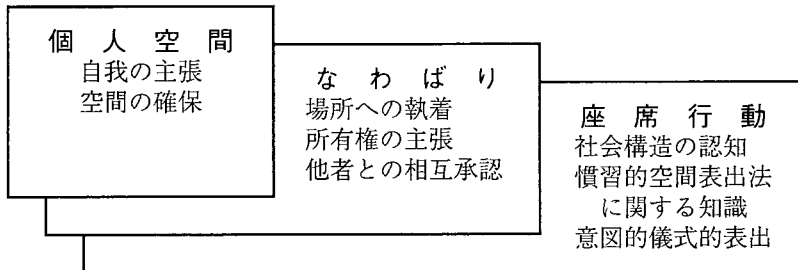


図2 個人空間，なわばり，座席行動の関係

3. 座席行動の規定要因

座席行動が生起するまでに、どのような要因がそこに関与し、行動を規定しているであろうか。座席行動現象の生起に関わる規定要因を整理するならば、まず、外部環境として物理的環境要因と社会的環境要因をあげることができる。次に、内部処理過程としては、生理生物学的要因と文化慣習的要因があり、さらに、中心的な心理処理過程として、個人心理学要因と社会心理学要因に分けることができよう。また、環境と主体をつなぐ入出力過程としては、環境認知と行動表出とがある。最終的には外部に表出された行動現象としての座席行動となる（図3）。これまでの諸研究の中にこれらの要因についての知見が見いだされるが、ここでは、以下に項目を列挙するにとどめる。

1) 外部環境

- ① 物理的環境要因：a. 座席行動空間の環境状況（屋外か，室内か，気象状況など）；b. 部屋の広

さ（面積，高さ），部屋の形状；c. 照明の明るさや位置，窓や出入口の位置，数；d. 机の大きさ，数量，形状，配置；e. 椅子（座）の大きさ，数量，形状；f. 座席の固定度（移動可能度）；g. 方位（方角）

② 社会的環境要因：a. 他者の存在，人数；b. 他者の年齢，性別，親近度；c. 伝統や文化・慣習，規範；d. 地位格差，社会的構造化の程度；e. 課題の有無

2) 内部処理過程

③ 生理生物学的要因：a. 空間に対する本能的傾向性；b. 未知の人に対する一般的な空間行動傾向；c. 空間行動の性差；d. 脳機能のラテラリティ（左右非相称）；e. 気象状況への感受性；f. 体調

④ 文化・慣習的要因：a. 文化・慣習についての知識；b. 社会的規範の強制力についての自覚

⑤ 個人心理学的要因：a. 知能・思考の発達程度；b. 性格，情動，不安；c. 興味，動機づけ，欲求；d. 自尊心；e. 認知された行動空間

⑥ 社会心理学的要因：a. 人間関係，交友度；b. 対人魅力；c. 集団風土；d. リーダーシップ；e. 社会構造，組織；f. 価値意識

3) 入出力過程

⑦ 環境認知：a. 感覚知覚能力

⑧ 行動意図：a. 行動への意図，態度

4) 行動表出

⑨ 座席行動：a. 着席位置；b. 順位（序列）；c. 着席時間；d. 着席の方向

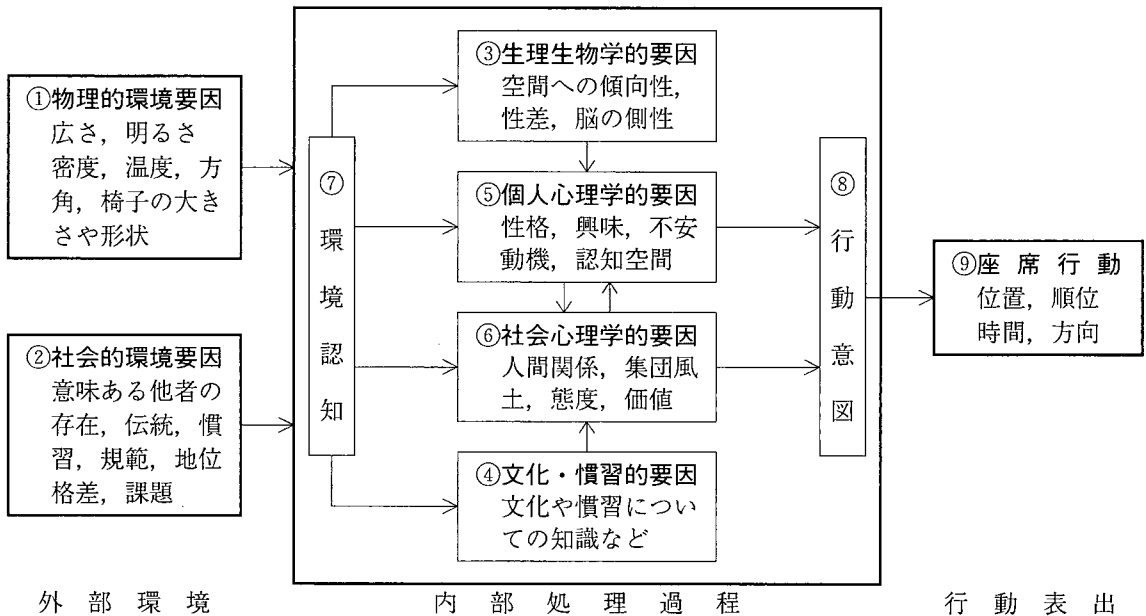


図3 座席行動の規定要因と生起過程

5. 座席行動研究の今後の課題

座席行動が生物的・心理的・社会的・文化的存在としての人間を理解する上で有力な行動指標になることを実証するために、次のような課題とアプローチが考えられる。

- (1) これまで種々の研究分脈で断片的になされてきた座席行動に関する諸研究を行動生物学的観点と文化社会的心理学的観点から展望するとともに、社会的行動空間に関する個人の認知の発達という枠組みによって統合的に体系化する。
 - ① 座席行動の生物学的起源についての研究：行動生物学の分野で研究が進んでいる動物におけるなわばり行動、個体空間、順位制などの進化過程と、座席行動との関係について明らかにする。
 - ② 座席行動の文化社会心理学的意義についての研究：座席の取り方の文化差や民族差、座席や席次などについての文化や慣習など、座席行動についての文化慣習およびその文化差を明らかにする。
 - ③ 座席行動の発達の研究：座席行動を支えているのは、個人の空間認知と社会的認知の発達であり、社会的知識の構成である。空間概念と対象概念の発達を主軸として、空間行動の諸概念の相互関係を明らかにするとともに、内面化された行動空間と座席行動の発達の過程を理論づける。
- (2) 社会行動現象としての座席行動の実際を観察するとともに、座席行動の規定要因を探索し、座席行動の数理的モデルを定立する。
 - ① 集合行動現象としての座席行動の研究：教室、会議室、集会場などの集合状況の中での座席占有分布は、その集団の風土（group climate）や人間関係、勢力関係、集団凝集度、リーダーシップ、指導者と成員の心理的な距離などを読みとる有力な手がかりになることを実証する。
 - ② パーソナリティ理解の測度としての座席行動の研究：座席行動とパーソナリティ要因の相関関係を明らかにする研究は、座席行動の規定要因を明らかにし、座席行動がパーソナリティや心理状態を理解する非言語的コミュニケーションとしての有効性を明らかにする。
 - ③ 座席行動の数理モデルの研究：座席行動に関わる諸要因を多変量解析によって統計的に分析することによって諸要因間の相対的重要度が明らかになり、それをもとに、座席行動を予測するための数理モデルを構築することができる。
 - ④ 認知された座席行動空間の特性ないし潜在的な座席行動空間の構造を統計的手法で明らかにする。
- (3) 座席行動に関する知見や理論を実際生活の中で応用する可能性を明らかにする。

教師や臨床家は生徒指導や患者との人間関係形成のために座席配置を利用する。また、会議を円滑にすすめるために主催者は席次や座席配置に腐心する。学校の教室、会社の事務室や会議室、工場の作業室などの建築物、公園、乗り物など、人間の生活環境に関心と責任をもつ建築設計者は、座席が利用者の心理に影響を与えることに無関心ではない。このようないわゆる応用心理学の中で座席行動がどのように扱われており、今後どのような可能性をもっているかを探る。

以上、座席行動の研究にあたって考慮すべき、空間行動の概念の整理、規定要因、研究法と課題について、試論を進めてきた。座席行動そのものに絞った文献展望およびその他の問題の議論については、別の機会にゆずることとする。

6. 引用 文 献

- Altman, I. 1970 Territorial behavior in human : An anlysis of the concept. In L. A. Pastalan & D. A. Carson (Eds.), Spatial behavior of older people. University of Michigan Press.
- Altman, I. 1975 The environmental and soocial behavior. Brooks / Cole.
- Altman, I. & Haythorn, W. W. 1967 The ecology of isolated groups. *Behavioral Science*, 12, 169-182.
- Altman, I. & Vinsel, A. M. 1977 Personal space : An analysis of E. T. Hall's proxemics framework. In I. Altman & J. F. Wohlwill (Eds.) Human behavior and environment. Vol. 2. Plenum Press. p. 181-259.
- Ardrey, R. 1966 The territorial imperative. Atheneum.
- Batchelor, J. & Goethals, G. R. 1972 Spatial arrangements in freely formed groups. *Sociometry*, 35, 270-279.
- Brower, S. N. 1965 The signs we learn to read. *Landscape*, 15, 9-12.
- Carpenter, C. R. 1958 Territoriality : A review of concepts and problems. In A. Roe & C. G. Simpson (Eds.) Behavior and evolution. Yale University Press, p. 224-250.
- Cline, R. J. & Puhl, C. A. 1984 Gender, culture, and geography : A comparison of seating arrangements in the United States and Taiwan. *International Journal of Intercultural Relations*, 8, 199-219.
- Cook, M. 1970 Experiments on orientation and proxemics. *Human Relations*, 23, 61-76.
- Edney, J. J. 1974 Human territoriality. *Psychological Bulletin*, 81, 959-975.
- 深沢文彦, 西形雄次郎, 菱山珠夫 1965 慢性分裂病者の行動特性-座席の生態学的研究- 精神神経誌, 67, 1197-1205.
- Giesen, M. & McClaren, H. A. 1976 Discussion, distance and sex : Changes in impressions and attraction during small group interation. *Sociometry*, 39, 60-70.
- Hall, E. T. 1966 The hidden dimension. Doubleday. (日高・佐藤訳 1970 『かくれた次元』 みすず書房)
- Hediger, H. 1950 Wild animals in captivity. Butterworth.
- 平尾武久, 台 弘 1964 講堂における座席の成立-個体行動の類型化とその Dynamics 精神神経誌, 66, 987-1003.
- Lorenz, K. 1969 On aggression. Bantam Books.
- Lyman, S. M. & Scott, M. B. 1967 Territoriality : A neglected sociological dimension. *Social Problems*, 15, 236-249.
- 松尾貴司 1993 座席選択に関する調査 愛知淑徳短期大学研究紀要 32, 73-79.
- 三井宏隆 1981 Overt behavior としての Personal Space 研究 実験社会心理学研究 21(1), 65-76.
- Pastalan, L. A. 1970 Privacy as an expression of human territoriality. In L. A. Pastalan & D. H. Carson (Eds.), Spatial behavior of older people. University of Michigan Press.
- Piaget, J. 1948 La naissance de l'intelligence chez l'enfant. (谷村・浜田訳 1978 『知能の誕生』

ミネルヴァ書房)

- Proshansky, H. M., Ittelson, W. H. & Rivlin, L. G. (Eds.) 1970 Environmental psychology : Man and his physical setting. Holt, Rinehart & Winston.
- Sommer, R. 1959 Studies in personal space. *Sociometry*, 22, 247-260.
- Sommer, R. 1961 Leadership and group geography. *Sociometry*, 24, 99-110.
- Sommer, R. 1966 Man's proximate environment. *Journal of Social Issues*, 22, 59-70.
- Sommer, R. 1967 Small group ecology. *Psychological Bulletin*, 67, 145-152.
- Sommer, R. 1969 Personal space : The behavioral basis of design. Prentice-Hall Inc. (穂山訳 1972 『人間の空間』 鹿島出版会)
- Stea, D. 1965 Space, territory and human movements. *Landscape*, 15, 13-16.
- Sundstrom, E., & Altman, I. 1974 Field study of territorial behavior and dominance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30, 115-124.
- 鈴木百合子 1986 会議場面における着席行動の研究—なわばり維持における集団内地位の効果— 心理学研究, 57(2), 83-86.
- 鈴木百合子 1990 演習クラスにおける着席行動の研究—女子大学における3事例の分析— 心理学研究, 61(2), 127-132.
- 鈴木百合子, 本間美智子 1984 着席行動におけるなわばり性の研究 心理学研究, 55(2), 109-112.
- 田中謙二, 一海知義 1978 中国古典選19 史記二 朝日文庫
- Vine, I. 1977 Territoriality and the spatial regulation of interaction. In A. Kendon, R. M. Harris & M. R. Key. (Eds) Organization of behavior in face-to-face interaction. Mouton, pp. 357-387.
- Wynne-Edwards, V. C. 1965 Self-regulating systems in population of animals. *Science*, 147, 1543-1548.
- 山田常雄他(編), 1983 岩波生物学事典(第3版) 岩波書店
- Yi-Fu Tuan (段義孚) 1977 Space and place : The perspective of experience. University of Minnesota Press. (山本訳 1993 『空間の経験』 筑摩書房)